

「記憶の場」が再構成する「満洲」 ——博物館と都市の観光による記憶の継承

村田 麻里子

1. 本稿の射程
2. 「記憶の場」がつなぐ過去と現在
3. 地域の記憶としての「満洲」——日本国内の博物館
4. 「観光のまなざし」がみた「満洲」——中国東北部の都市と博物館
5. さいごに：博物館と都市の観光による記憶の継承

1. 本稿の射程

近年、ホロコーストや原爆投下など、第二次世界大戦に関する記憶の風化をどのように防ぐのかが世界的な課題となっている。戦後76年が経ち、経験を直接語れる人がいなくなるなかで、それ以外のかたちでの記憶の継承の方法が模索されている。

博物館は、そうした負の記憶を留める「記憶の場」(ノラ 1984)として、とりわけ1990年代以降に積極的につくられ、現在も増え続けている。展示を通して負の記憶を語る手法も検討され、社会史的な視点を取り入れることで、経験者個人の物語を反映させてきた(村田 2021a)。一方で、近年、戦争や災害など、人類の負の記憶の場所を訪ね歩く「ダークツーリズム」の意義が増している。「記憶の場」にまなざしと身体を介在させ、その土地と空間を全体的な文脈の中で理解する「観光」という行為は、新しい学びのスタイルとして注目されている(たとえば井出 2018、山口他 2021)。博物館や都市は、いずれも公共性の高い、開かれた空間であり、その気になれば容易にアクセスが可能である。

そして、観光という行為は、場所や空間が保持・継承する記憶を、現代に生きる私たちがなぞり直すことを可能にする。

本稿は、21世紀における「満洲」をめぐる記憶の在り方について、「記憶の場」としての博物館や都市の観光を通して考察する。

1931年の満洲事変を経て、日本が中国東北部にその存在を主張した「満洲国」には、多くの軍人や民間人が渡り、終戦時には、民間人155万人¹⁾、さらに軍人・軍属を加えた約200万人の日本人がいたと言われる。そのうち、27万人²⁾は、いわゆる国策としての開拓移住事業によって、開拓民として内地から入植した民間人である。

1945年8月9日、日本の敗戦が決定的になると、終戦を待たずしてソ連の侵攻が始まり、逃避行した人々は引揚者として日本に帰国した³⁾。帰国後は、故郷に戻った者、親戚を頼った者、新たな土地で再び開墾に励んだ者⁴⁾など、それぞれの戦後生活を迎えた。

しかし、「満洲」の存在は、戦後の日本では等閑に付されていく。徹底的な軍国主義の解体と、民主主義社会の構築のなかで、日本の帝国主義そのものを忘却する力学が、強く働いた。渡満経験者や引揚者は、戦後日本においては社会的スティグマの対象となり、彼ら自身も口をつぐんだ⁵⁾。

1) 出典により数字に差があるが、155万人がひとつの目安になっている。

2) 満蒙開拓平和記念館が作成した資料には、開拓団員数220,225人、義勇軍隊員数101,627人の合計321,882人が送出されたというデータがある（出典は満洲開拓史刊行会編『満洲開拓史』（1966年）より、長野県開拓自興会満州開拓史刊行会編『長野県満州開拓史（総編）』（1984年）が引いたもの）が、一般的には実際に渡った人は27万人程度と言われているため、本稿でもそれを踏襲する。

3) この混乱のなかで、およそ245,400人の日本人が現地でも亡くなったとされ、うち約8万人が開拓団関係であるという（高 2001）。また、中国残留孤児、残留婦人の問題なども残した。

4) たとえば黒龍江省の千振（ちふり）という土地に移住した千振開拓団は、帰国後、栃木県那須町に集団で移り住んで開墾し、その土地を千振と名付けている。

5) 山室信一によれば、日本には「満洲国」以前から、「満洲ゴロ・満洲浪人」という言葉があった。「日本で生きていけない人あるいははみ出していた人が逃亡して暗躍する場所というイメージが一貫してあり、「それが戦後の引揚のときにも残存して、満洲からかえって来た人に対するある種の差別が行われることにもなった」（山室 2002: 47-48）という。

一方で、そうした周縁化の力学に抗うように、一部の渡満経験者達は、精力的にネットワークや組織を構築し、「満洲」をめぐる体験を、会報や会合、自費出版の冊子等を通じて共有してきた。佐藤量によると「満洲に関する史資料の収集・整理・公開は、研究者よりも先に引揚者本人によって行われてきた」(佐藤他 2020: 3) という⁶⁾。戦後の日本社会のなかで、彼らの多くは「満洲での人間関係に基づいた団体に帰属する傾向」(同上)にあり、「満洲」を生きた彼らの記憶は、基本的にその内部で循環してきたといえる。

こうした手記や回想録が膨大にある一方で、大多数の日本人にとっては、「満洲」は「時折、耳にしても何らイメージを思い浮かべる手立てさえない歴史的名辞にすぎなくなっている」(山室 2004: 4)。終戦から76年が経った現在、「満洲」の記憶は、もはやごく一部の人間のものとなりつつある。そうした中で、今後、日本の歴史の一部としての「満洲」の記憶は、どのようなかたちで継承されうるだろうか。いかにして次世代は、「満洲」を知り、考えていくのだろうか。

自らが生きる社会のポストコロナリティに対する自覚と、過去の植民地主義に対する自省、さらには植民地主義的認識を脱構築する試みは、近年「脱植民地化(デコロナイゼーション)」という概念として枠づけられている(村田 2021b)。日本が自らの帝国主義や侵略の歴史と向き合い、その遺産について問い続けることは、今後グローバル社会において他国と対話する際に避けて通ることできない所作といえよう。いや、それ以前に、当時日本が国家の「生命線」とみなした「満洲」の存在について考えることは、日本の近代とは何かを問うことそのもののはずである。戦後の日本における第二次世界大戦の記憶の継承は、専ら原爆と空襲の被害に集中してきた。しかし、日本がアメリカと戦争し、空襲を受け、最終的に原爆を投下された背景には、日本の「満洲」侵略

6) 満洲研究自体が進んだのは、1990～2000年代にかけてで、経済史や政治史中心の研究に、社会学やオーラルヒストリー研究も加わっていった。

があり、両者はセットで把握されなければ、そうした犠牲の理由も、日本の近代への理解も、結局は遠のいていくのではないだろうか。観光客や修学旅行生で賑わう広島平和記念資料館や長崎原爆資料館が、原爆投下をめぐるナショナルな「記憶の場」であるのに対して、その原因となった「満洲」をめぐる記憶はどこにあるのだろうか。

本稿は、日本人の「満洲」移動に関わる、日本（内地）と「満洲」（外地）という、2つの「記憶の場」から、これらの場所を通じて再構成される「満洲」と、その記憶のあり方について考える試論である。すなわち、出発地であり、帰還地ともなった日本⁷⁾、そして目的地であり、新天地であった「満洲」が、それぞれ「記憶の場」としてどのように現代に作用しうるのかについて考える。具体的には、日本国内の「満洲」関連の博物館と、中国東北部に残る「満洲国」の都市の遺構や博物館という、2つの「記憶の場」の在り方と、それらを訪問・観光する行為について考える。そのうえで、博物館とはどのような「記憶の場」なのか、都市という「記憶の場」を観光することがなぜ・どのような記憶の継承を意味するのかを分析する。

なお、表記は、地の文では「満洲国」及び「満洲」（括弧付き）を用いる。また、本稿では「満洲」を「関東州」時代と「満洲国」時代を含む、日本の中国東北部支配のシナリオに含まれる時代・領域として捉える。ただし、引用箇所に関しては、原著をそのまま引く形で満州、「満州」、満洲、「満洲」、を使い分ける。

7) 出発地としての故郷は、人々が捨て去る選択をした地であることを意味した。その後、敗戦とロシアの南下により引揚を余儀なくされ、図らずも「帰国」「帰還」する地にもなったが、それは必ずしも出発地と同じ土地・場所への帰還を意味しない。また、帰還できずに命を落とした人々も多くいた。

2. 「記憶の場」がつなく過去と現在

ピエール・ノラは、ある集団の「集合的記憶」(アルヴァックス 1950)を保持し、想起する物質的または象徴的な空間を「記憶の場 (les lieux de mémoire)」(ノラ 1984)として拮げた⁸⁾。ノラによれば、「記憶の場」は、必ずしも物理的な空間を伴うものとは限らない。しかし、歴史における地理的・物理的な空間の重要性と相まって、実際には多くの土地や場所が、博物館や記念館の設立、記念碑の設置、歴史的建造物の保存・再利用といった方法で刻印され、残されてきた。こうした場が、過去を現代の人々と接続させ、記憶を保持、継承、更新すると考えられてきたのである。

記憶に関する研究は、ヨーロッパにおいては第二次世界大戦、とりわけホロコーストの記憶をいかに継承するかという歴史的課題と分かちがたく結びついており、博物館でいえばアウシュヴィッツ平和博物館、都市の記念碑でいえばベルリンの「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」⁹⁾が、そうした「記憶の場」として語られるもっとも有名な事例である(村田 2021a)。同様に、古い街並みを現在にまで残す都市という空間そのものも、過去から現在への連続性を支える枠組みをもつ。そこには過去を想起させる建築物や、広場などの空間、道路・区画等のインフラがあり、そこに住まう人々の日常生活に溶け込みながら、「記憶の場」としての想起と忘却が繰り返される。なによりも、公共空間や公共施設としての「記憶の場」は、当事者以外の人々の目に触れ、新たな回路をつくり、集合的記憶を再構成し続ける。

一方、「場所の記憶 (Gedächtnis der Orte)」の議論を推し進めたアライダ・ア

8) ノラによれば、生活に根ざして代々継続していた「記憶の環境 (milieu de mémoire)」が断絶すると、その痕跡がこれまでの文化の意味の枠組みとは異なる形で人々のなかに記憶として保持される「記憶の場 (lieu de mémoire)」に変わるという。

9) 記念碑の下にはセンターがあり、イスラエルの国立記念館ヤド・ヴァシェムの提供によるホロコースト犠牲者の氏名や資料を元に、個人をひとりひとり取り上げて展示している。

スマンは、場所が、時に人間の記憶以上に「想起の主体、担い手となることができる」（アスマン 1999=2007: 355）ことを示唆する一方で、トラウマを抱える多くの土地や場所が、記念の地や博物館として枠づけられることは、矛盾も抱えていると指摘する。

記念の地や博物館に改造された想起の場所は、深刻な逆説に屈している。これらの場所を真正なものとして保存しようとすればするほど、不可避的に真正さを失うことになる。場所は保存されることで、すでに覆い隠され、置き換えられる。（アスマン 1999=2007: 397）

すなわち、保存には改造という行為が必然的に伴うため、結果として本来の場所の記憶はそれによってかき消され、別のかたちの記憶に書き換えられてしまうという。博物館が建てられることで、その土地は、以前とは異なる場所になる。また、博物館による展示や語りは、時として集合的記憶の再構成に、強力な影響を及ぼす。さらに、本稿でみるように、都市の遺構も、観光や開発を目的とした改修・改築を免れ得ない。

とはいえ、アスマンはこうした変化を否定しているというよりも、場所による想起とは、このような集団による選択と忘却が伴うことを指摘しているに過ぎない。すなわち、想起の場所としての記念の地や博物館は、自然な記憶とは異なり、記憶の容れ物としての外在化されたメディアと制度を伴い、それを維持する実践によって、その集団の選択的な記憶が解釈されるという¹⁰⁾。

記憶の継承は、人や時間や媒体を経由する中で生じるさまざまな歪みや改変をいわば前提としている。すなわち、「どの記憶もパースペクティヴ化されており、そこから排除され、忘れられるものによって規定される。『記憶』というコンセプトでは、『何が』ではなく『いかに』、想起される過去ではなく、想起の

10) アスマンはこのような記憶の在り方を「文化的記憶」と呼ぶ。

行為が遂行される現在に関心が向けられる」(安川 2007: 560) といえる。「記憶の場」は、人々のなかで想起と忘却をくり返しながらか、少しずつ更新されていくからこそ、現代の人とつながることができるのである。

3. 地域の記憶としての「満洲」——日本国内の博物館

では、戦後日本において、強い忘却の力学と記憶の風化にさらされてきた「満洲」には、どのような「記憶の場」があるだろうか。その「記憶の場」はいかにして、場所として立ち上がるのだろうか。

まず、国内に数多く点在するのは、「満洲」開拓団に関する記念碑である。たとえば坂部晶子によると、開拓団をもっとも多く送り出した長野県内には、52の記念碑¹¹⁾があるという(坂部 2007, 2008)。これらは主に1960年代後半～1970年代に、村から多くの開拓民を送出した市区町村や、同窓会・関係者団体によって集中的につくられている。また、公益財団法人全国開拓振興協会¹²⁾の調査では、「満洲」に関わる国内の開拓記念碑は宮城、山形、群馬、千葉、栃木、長野、兵庫、京都、徳島にあるものが報告されており、全国につくられていることがわかる¹³⁾。

一方、「満洲」を主題とする日本国内の博物館は、2つしかない。長野県下伊那郡阿智村にある満蒙開拓平和記念館と、茨城県水戸市内原町にある内原郷土史義勇軍資料館である。また、「満洲」を含め各地からの引揚を扱った博物館としては、京都府舞鶴市の舞鶴引揚記念館があり、主に引揚の実態とシベリア抑留に焦点をあてている¹⁴⁾。以下では、満蒙開拓平和記念館と内原郷土史義勇軍資

11) 慰霊碑と開拓記念碑をあわせたもの。

12) 開拓記念碑調査事業として、戦後全国各地の開拓地に建立された開拓記念碑を調査・公開している。<https://www.kaitakusya.or.jp/jigyuu.html> (最終閲覧 2021.8.15)

13) おそらくこの調査で把握されているものはほんの一部であろう。

14) 館は、1998年に舞鶴港の横につくられた。終戦後、海外にいた660万人以上の日本人が帰国する港として、国は舞鶴、浦賀、呉、下関、博多、佐世保、鹿児島、横浜、仙崎、門司

料館という2つの博物館が、何を語り、どのような「記憶の場」として機能しているのかについて、歴史的背景と共にみていこう。

(1) 満蒙開拓平和記念館

「満洲国」は中国東北部、現在の遼寧省・吉林省・黒龍江省の三省と内蒙古自治区に一部跨がる土地に存在した幻の「国家」である。日本が満蒙の領有にこだわったのは、ここが「植民地朝鮮と国境を接し、ソ連と中国に対する国防上の最前線」(山室 2004: 36)であったからだ。換言すれば、「満洲」は日本の地理的要であり、その確保に向けた帝国の拡張は、既に日清戦争から始まっていた。南満洲鉄道の鉄道付属地を足がかりに侵略を進めていた関東軍は、1931年、柳条湖近くの線路を自ら爆破して満洲事変を起こすと、翌年には、清朝最後の皇帝愛新覚羅溥儀を執政に迎え、「満洲国」の成立を宣言した。

やがて、日本政府は、冷害・凶作による食糧不足——いわゆる昭和恐慌——に陥った国内(内地)の人減らしと、「満洲」(外地)の実態化を目的として、大量の開拓民を移民として「満洲」の地に送出する国策を立てた。まず、1932年から、移民推進派による試験的な入植と開墾が始まる。その後、1936年には広田毅毅内閣による「二十カ年百万戸送出計画」が閣議決定され、教育業界や政府関係者による勧誘や、満洲映画協会(以下、満映)¹⁵⁾による宣伝映画製作など、本格的な誘致が始まった。開拓民達は、「人間の盾」としての役割も担っており、そのほとんどが、ソ連との国境の北満地域に送られた(図1)。当時、満

を引揚港として指定したが、中でも舞鶴は、1950年以降は国内唯一の引揚港として1958年まで引揚船を受け入れ、66万人の引揚者と16,269柱の遺骨がここで日本の地を踏んだ(館HPより)。2017年には舞鶴引揚記念館に収蔵するシベリア抑留と引き揚げ関係資料「舞鶴への生還1945-1956 シベリア抑留等日本人の本国への引き揚げの記録」が、ユネスコ世界記憶遺産に登録された。

15) 1937年に長春(新京)に設立された国策の映画会社。「五族共和」「王道楽土」をスローガンとするプロパガンダ映画や娯楽映画を撮影した。理事長は甘粕正彦(1939~1945年)。戦後は中国共産党に引き継がれた。満映の建物は2011年に長影旧址博物館として公開されている(図45・46)。

「記憶の場」が再構成する「満洲」(村田)

映がつくった宣伝映像には、肥沃な満蒙の地で農作物を収穫する幸せそうな開拓民の姿が映し出されている。

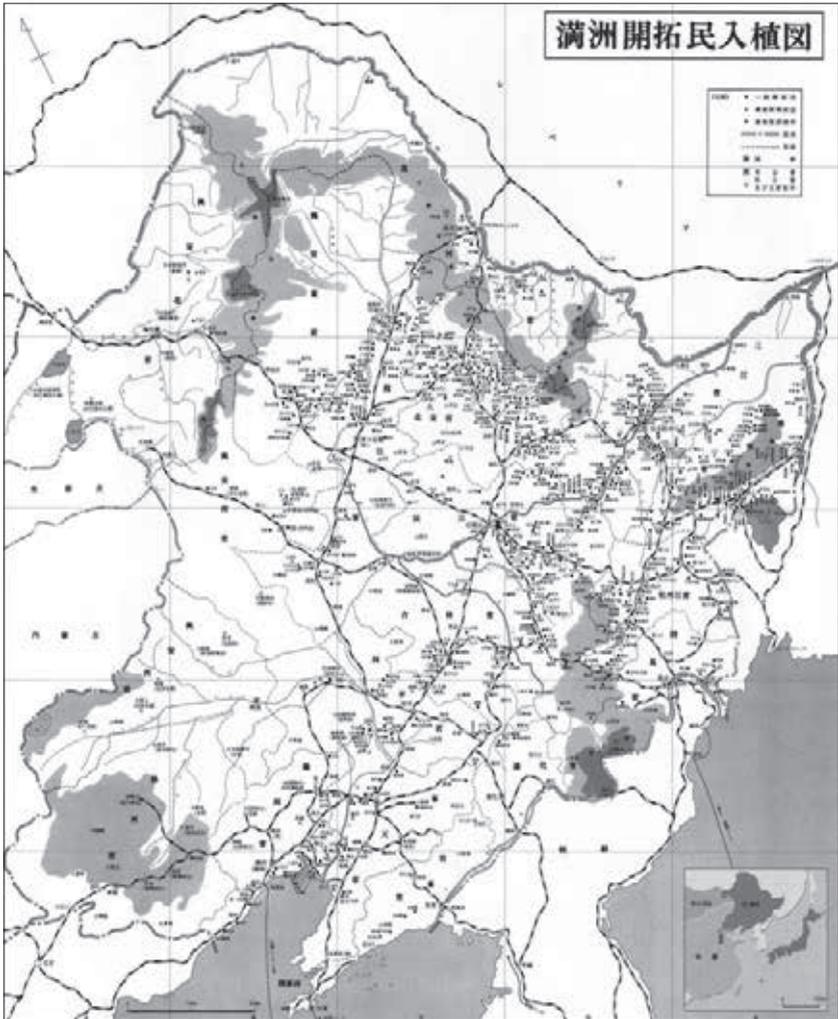


図1 満洲開拓民入植図。満蒙開拓平和記念館より購入(2019年8月版)。一般開拓団、義勇隊開拓団、義勇隊訓練所がいずれも北満に集中していることがわかる。

しかし、貧しい故郷を棄て、新天地を求めて渡満した開拓民達は、現地で与えられた土地が中国の人々から「略奪」した（タダ同然で買い上げた）ものであったことを知る。その後、戦局の悪化にともない、開拓民の男達は、不文律に反してことごとく徴兵され、敗戦間際になって村に残っていたのは女性・子供・老人であった。彼らはソ連の侵攻に伴って逃げ惑い、北満の村々から引揚港までの過酷な逃避行を経て、帰国する。帰国後、一度は故郷に戻るものの、そこに生きる場所はなく、都会に出たり、新たな土地を開墾した人も多くいた。

長野県は32,992人¹⁶⁾ という全国最多の開拓民を送り出した県であり、そのうち引揚者は、約半分にあたる16,949人¹⁷⁾ である。こうした事情から、長野県は他府県と比べて「満洲」を記録することには意欲的であり、現在でも資料やオーラルヒストリーの収集が熱心に進められている¹⁸⁾。また下伊那・飯田は県下でその4分の1にあたる8,389人¹⁹⁾ を送出しており、全国でもっとも多くの開拓団を送り出した地域と言われている。満蒙開拓平和記念館は、こうした地域の実態を踏まえて建てられたものである。館は、現館長の寺沢秀文を含む飯田日中友好協会を支える人々の情熱によって2013年に開館した、民間の施設である。

飯田日中友好協会の前身である長野県日中友好協会下伊那支部は、戦後から残留孤児等の帰国支援事業に注力してきたが、1998年以降は満蒙開拓の語り継ぎに力を入れるなかで、語り継ぎや資料収集の拠点となる資料館の必要性が言及されるようになったという（寺沢 2013）。2006年7月の飯田日中友好協会の

16) 長野県開拓自興会満洲開拓史刊行会編『長野県満洲開拓史（総編）』（1984年）から満蒙開拓記念館が引用した数字。ここには、義勇隊の未渡満者の人数などが含まれないため、註2の数字とは異なっている。

17) 未帰還者16,043人のうち、14,940人が死亡、1,103人が残留、213人が不明であるという。データ出典は註10に同じ。

18) 飯田市歴史研究所では、定期的に「オーラル資料」を発行している。また、2021年現在、長野県立歴史博物館にて、企画展「青少年義勇軍が見た満洲——創られた大陸の夢」（2021年7月21日～8月22日）も開催されており、当時いかにして青少年たちがメディアや教育、娯楽を通して義勇軍へのあこがれを募らせていったか、という視点で構成されている。

19) データ出典は註10に同じ。

「記憶の場」が再構成する「満洲」（村田）



図2 満蒙開拓平和記念館（以下、出典がないものは筆者撮影。すべて2015～2016年に撮影したもの。）



図3 満蒙開拓平和記念館 入口。

定期大会で記念館設立が採決され、そこから資金集めに奔走するが、行政からの財政支援は得られなかった。2008年に、阿智村から土地の無償貸与を受ける。さらに2010年の準備委員会主催の「満蒙開拓歴史展」の開催を踏まえ、ようやく県からの建設費支援にもこぎ着けたという（同上）。

記念館は、約436m²のこぢんまりとした建物である（図2・3）。建物の半分を使って玄関、受付、学習ルーム、カフェ、トイレなどのファシリティがあり、残りの半分が展示室になっている。展示は、史実としての満蒙開拓を時系列に沿って説明する「序章 時代を知るタイムトンネル」、「大陸へ 映像で見る満洲」、「新天地満洲 希望の大地」、「敗戦と逃避行 絶望の彷徨」、「引揚・再出発 失意の帰還」コーナーと、「証言 それぞれの記憶」、「望郷 山本慈昭²⁰と残留孤児」、「平和な未来へ」というよりメッセージ性の高いコーナーの2つで構成されている。

館の姿勢を象徴するコーナーは「証言 それぞれの記憶」で、ここでは経験者の体験が綴られたものを、ランプの下で開かれた本のように読むことができるようになっている（図4）。これらひとつひとつは個人の経験であると同時に、

20) 1902～90年。阿智村長岳寺の住職であり、残留孤児の帰国支援に注力した人物。



図4 「証言 それぞれの記憶」コーナー。館内は撮影禁止のため図録より転載。

長野の開拓民の集合的記憶であるということが出来る。「満洲」の記憶と語りについて研究している坂部晶子によると、開拓民の語りは共通する部分も多く、「モデル・ストーリー」、すなわち語り手の属するコミュニティの代表的な語り抽出できるという(坂部 2007、2008)。その意味で、この記念館の伝える記憶も、そうし

たモデル・ストーリーと重なっているといえる。また、体験者やボランティアによる解説や、学校の受け入れ、語り部の派遣なども積極的に行い、記憶の継承に力をいれている。特に飯田日中友好協会が元開拓団員ら60人と2003年に立ち上げた「満州語り部の会」の活動は、現在も続いており、館のコンセプトの核になっている。さらに、関係者らの手記・回想録(自費出版や私家版)を含む資料は2,000点を超え、一部は学習ルーム・図書ルームで閲覧できるようになっている。

このように、記憶を語る展示コーナー自体は小規模でも、ここにアーカイヴされている記憶は、この館の活動全体を通して語られ、共有され、継承されており、まさに「記憶の場」としての博物館となっている。記念館は、周囲に観光地らしきものではなく、地の利もよいとはいえない(近くに昼神温泉があるため、セットで観光することを館は勧めている)。それでも、開館した2013年4月から2019年6月までの6年間で約162,000人、年間約27,000人近くの来館者を迎えており、さらに小学校、中学校、高校の学校訪問もあるという(寺沢 2019. 5.26)。

ちなみに、寺沢自身は渡満していないが、両親が開拓団として水曲柳開拓地(現吉林省舒蘭市)に入植しており、帰国後に下伊那に再入植した。水曲柳開拓団の関係者や家族でつくる水曲柳会は現在も存続しており、1980年以降11回に

亘って旧開拓地を訪ねる訪中事業を行っている。2019年8月にも元開拓団員の家族や一般参加者を含む15名が現地の墓地や長春を訪問したが、高齢化のために参加できた元開拓団員は1名だったという(南信州新聞 2019.9.6)。

父から「満洲」の話聞かされて育った寺沢が館の姿勢として強調するのは、あくまでも自分たちは加害者であることを忘れない、ということだ。寺沢の父は、シベリア抑留を経験してから帰国し、再入植地で苦勞して開墾するなかで「自分たちの大切な畑や家を日本人に奪われた現地の中国人たちの悲しみ、悔しさ」(寺沢 2013: 30)についてよく語っていたという。「被害と加害、両方の側面があるのが、満蒙開拓団の真実」(朝日新聞 2021.8.31)であり、双方を伝えていくことが自分のような開拓団2世という身内が取り組むべきことだと寺沢は述べる。館の「証言 それぞれの記憶」コーナーにも、そうした加害に対する意識の声が残されている。後述するように、国策の被害者の証言を集めながらも、この姿勢を崩さないことは、現代の日本においては簡単なことではない。しかし、これこそが、寺沢の設立の動機であり、活動の際の揺るぎないポイントになっている。

(2) 内原郷土史義勇軍資料館

1937年になると、「二十カ年百万戸送出計画」に向けた人材不足を補うべく、日本政府は数え年16～19歳の青少年達を義勇兵として送り込むことを計画する。満蒙開拓青少年義勇軍制度である。彼らは「鉄の戦士」と呼ばれ、普段は農業に従事ながら、有事には武装して前線を守ることが任務であった。全国から集められた青少年たちは、茨城県内原町の内原義勇軍訓練所で2、3ヶ月の内地訓練を行い、その後渡満し、現地訓練所で3年の訓練を経てから開拓団に編入された。その数86,530人、そのうち24,000人が死亡したといわれる²¹⁾。

訓練は、農事訓練、武道、軍事教練を基本とし、極寒となる冬は、教科書で

21) 内原郷土史義勇軍資料館資料より。

の教学が主となった。彼らの住まいは日輪兵舎（図5）と呼ばれ、内原義勇軍訓練所の所長加藤完治の皇室崇拜と農本主義が結びついた開拓教育をイメージしてデザイン²²⁾された（松山 2015）。訓練所内につくられたこれらの兵舎は、「満洲」の地へのあこがれを強く抱かせたという。

義勇軍訓練の実態を展示する内原郷土史義勇軍資料館は、2003年開館した（図6）。館は、「郷土史ゾーン」、「義勇軍ゾーン」、「交流ゾーン」の3つのゾーンからなる、568m²の小さな博物館である。「義勇軍コーナー」の展示は、義勇軍のコンセプトや組織構成、入植場所などの基本情報に加え、「くわの戦士の一日」「基本的な訓練」「さまざまな訓練」など、訓練のスケジュールや内容にフォーカスしており、写真や解説パネルに加え、青少年達が実際に使用していた制服、農具、木刀、教本、食器、義勇軍ラップなどの実物資料が展示されている（図7）。また、「交流ゾーン」の図書コーナーには、満蒙開拓に関する様々な書籍や各地域の編纂した開拓史、さらには自費出版の回想録や、手



図5 日輪兵舎の復元。



図6 内原郷土史義勇軍資料館 入口。



図7 「義勇軍ゾーン」の部分は、日輪兵舎の形を模して円形になっている。

22) 創案は建築家の古賀弘人。

描きの紙芝居などが置かれている。

さらに、館から少し離れた屋外に、日輪兵舎が再現されている(再び図5)。これは、義勇軍関係者が組織する内原訓練所史跡保存会が1985年に復元したもので、管理していた会員が亡くなり、そのまま町の中央公民館に預けられた形となっていたものを、資料館の一部としたものである。兵舎内には青少年達の使用した衣類、柳行李、調理鍋、飯盒、食器等が置かれており、寄付した関係団体の団旗とともに展示されている。

ところで、資料館は現在水戸市立²³⁾で、教育委員会の下に置かれているが、資料館の設立やその経緯に関する一般情報はほとんどない。朝日新聞1995.9.29には、内原町が義勇軍の資料館を建設する方針を固め、調査委員会を発足させることが書かれており、その背景には義勇軍出身者からの陳情書と、大関茂町長の町おこしへの意欲があることが記されている。また、朝日新聞1997.8.18には、大関町長が三選を果たし、義勇軍の記念館を切望しつつも、「侵略か開拓か『どういう形に』」したらよいかという「町長の悩み」があったことが記されている。

一方、義勇軍出身者の同窓会のひとつである八洲会の会報『嫩訓の思い出』(No. 22、1996.3発行)²⁴⁾によると、桜基金の声に賛同した義勇軍出身者の全国組織である全国拓友協議会の請願が、内原町議会を動かしたと記されている。また記事によると当時毎年500~600人程度の青少年義勇軍出身者が訓練所跡を訪れたという。そして、九州の知覧町には特攻記念館があり、土浦市には予科練記念館があり、舞鶴港には引揚記念館があるにもかかわらず、内原には碑がひとつあるのみで、犠牲者に申し訳ないため、建設に向けてさらに支援してほしいという呼びかけが書かれている。ちなみに、桜基金とは、1993年に設立された全国有志による基金で、かつて義勇軍が自ら改修した訓練所正面から内原

23) 2005年2月に内原町を合併した。

24) 佐藤他2020で『嫩訓の思い出』を分析した大石茜氏より情報提供いただいた。

駅までの道路1.5キロに植えた桜100本にちなんで、内原の訓練所跡に桜を補植することを目的としていた。

これらを総合すると、同窓会や関連団体の強い働きかけと、大関町長の町おこしへの意欲により、資料館の建設が実現したようだ。実際、資料館のすぐ外には寄付者銘碑が大々的に飾られており、その先頭に、内原訓練所史跡保存会と内原さくら基金²⁵⁾の名があった。

このように、町長の町おこしの一環であったとはいえ、資料館の設立に至るには関係者の熱心な運動があったことがわかった。さらに、資料館の周囲には、日輪兵舎の復元、内原訓練所の碑、訓練所跡の桜、渡満道路、加藤完治像、加藤完治記念館、地蔵院、弥栄神社等の義勇軍関係史跡が点在し、土地全体が「想起の場所」になっており、現地には常に多くの義勇軍出身者が訪れていた。にもかわらず、それらを積極的に次世代に語り、継承しようという姿勢は、町や記念館の展示からも、遠隔からの情報収集からも、ほとんど感じられないのである。

これには諸々の理由が考えられるが、ひとつには義勇軍関係者の語りの位置の難しさがあるといえよう。大石茜による義勇軍出身者の同窓会「八洲会」の会報分析によると、会報『嫩訓の思い出』には、多用される「義勇隊精神」や「開拓精神」という言葉に体现される集合的記憶があるという（大石 2020）。それは、『義勇隊精神』を語らねば、青少年義勇軍として渡満したという自らの経験を語り得ない」（大石 2020: 188）という、戦後の彼らの社会的状況とセットで捉えなくてはならない語りであり、単純な美化とは異なる。実際、このようなノスタルジアを増幅させるステージを過ぎると、訓練所内のいじめや暴力に対する声や、加藤完治を神格化することへの違和や怒り、国策に翻弄され、結果として加害に加担したことへの嘆きなど、義勇軍出身者の中からも、より

25) 会報『嫩訓の思い出』では桜基金と漢字で綴られているが、碑銘ではひらがなになっている。

「記憶の場」が再構成する「満洲」(村田)

多様な声が聞かれるようになる(同上)²⁶⁾。しかし、先述した「町長の悩み」からもわかるように、戦後の日本社会において公立の博物館が国策としての義勇軍制度を大々的に取り上げること、ましてや「義勇隊精神」や「開拓精神」の語りを紹介することは、加害の歴史を美化すると捉えられかねない。一方で、元は農村の貧しい青少年達でありながらも、義勇軍という国策に、より深く組み込まれた存在として、開拓団の農民のような素朴な被害の語りもまた、政治性を帯びてしまう。記念館に関する最小限の情報しか得られないのは、このような「満洲」を巡る語りの難しさと関わっていると考えられる。

(3) 博物館という「記憶の場」

この2館を訪れば、我々は、少なくとも日本国内において、満蒙開拓ゆかりの地に残された記憶を確認できる。本稿の冒頭で述べたとおり、場所のもつ記憶をいかにして保持するかという問いへのひとつの回答は、博物館(記念館)や記念碑をつくることである。最多の開拓民を送り込んだ地に設立された満蒙開拓平和記念館と、国内唯一の訓練所のあった地に設立された内原郷土義勇軍資料館は、いずれも場所の記憶を物理的に留める「記憶の場」である。

それにしても、27万人の開拓民を含む、200万人もの国民を移動させた大規模な国策としての「満洲」を主題として扱う博物館は、なぜ国内にたった2館(しかも1館は民間の運営)しかないのだろうか。そこには少なくとも3つの理由があると考えられる。

1つ目に、行政側も、引揚者側も直視したくない歴史であり、積極的に公の場で語ろうとする動きがほとんどなかったという点である。満蒙開拓平和記念館館長の寺沢秀文は、これだけ多くの日本人を移民させた国策でありながら、その史実を扱う博物館が存在しないことに、「開拓団を送出した側、また旧満州

26) 大石茜によれば、八洲会の正史である『嫩江訓練所史』編纂の過程において、発言する会員の層や、語りが多様化したという(大石 2020)。

現地から生還出来た人々にとっても余り振り返りたくは無い不都合な史実であった」(寺沢 2013: 34) ことを痛感したという。国策推進の先頭にたった県、市区町村、教育界は、その過去には触れたくない。それゆえに寺沢らの資金集めは難航し、官民共同の建設はかなわなかった。また、引揚者たちは、戦後に価値観の一変した日本で、侵略者のレッテルを貼られ、疎外感を味わっており、いわば二重の意味で「故郷」の喪失を経験している。公の場で語りたがらないのは、国や自治体だけではなく、引揚者たち自身の選択でもあった。一方、関係者の熱意でかろうじて公立の館として設立された内原郷土史義勇軍資料館が、黙して語ろうとしないことは先述したとおりである。青少年義勇軍の創設と訓練についてまとめた内原訓練所史跡保存会事務局編1998のあとがきにも、「渡満後の満洲青年義勇隊については必要の範囲に止め、記述を省いた」(p. 507)とあり、内原での訓練が渡満してどのように継続され、現地でどのような意味を持ったのかという肝心の部分を敢えて語らないことを明文化している。

2つ目に、博物館という施設において現代史を語ることの難しさである。現代史の展示、とりわけ戦争を展示で語ることの難しさは、歴史系博物館共通の課題である(国立歴史民俗博物館編 2003)。1983年に開館した国立歴史民俗博物館でも、戦争の展示は長らく実現に至らなかった。2010年のリニューアルにおいて「現代」展示室の開室がようやく実現し、国内唯一の通史を語る博物館になっている(時里・梶尾 2014)。また、多くの地方博物館では、現代史の展示は存在しないか、最小限のものになっており、あっても総力戦下における人々の暮らしに焦点をあてることで、まだ評価が定まっていない現代史への直接的な言及を回避しているかたちになっている。満蒙開拓平和記念館が私設である理由、内原郷土史義勇軍資料館が黙して語らない理由も、ここに見いだせよう。

3つ目に、日本の博物館における記憶研究の不在がある。記憶の研究がヨーロッパでホロコーストの研究として立ち上がってきたこととあわせれば、これは2つ目の理由(戦争を語ることの忌避)とも関わっていると言えよう。「2」でみたように、博物館は「想起の場所」(アスマン 1999)として、その場所性

が重要な意味をもつが、金子淳が指摘するように「実のところ、博物館を主要な研究対象とする博物館学においては、これまで『場所』概念を自覚的に研究対象にしてきたとは言いがたく」(金子 2019: 69)、「記憶の場」としての博物館は、博物館学の中心的な関心となつてこなかった。そして、「もっぱら『場所』は『地域』と読み替えたうえで、博物館の『地域性』や『地域博物館論』として議論され」(同上) てきた²⁷⁾。

こうした博物館学の在り方は、単に博物館の学問上の位置づけの話にとどまらない。実際の博物館の在り方や、博物館の語りそのものにも作用している。日本の多くの博物館にとっては、館が地域性をもつことや、地域に貢献することが、そのアイデンティティとなっている。

実際、満蒙開拓は、全国から100万戸送出を計画し、27万人を移民として送出した大規模な国策だったにもかかわらず、満蒙開拓平和記念館も、内原郷土史義勇軍資料館も、ナショナルな記憶というよりも、どちらかといえば地域史・郷土史の文脈が強い。つまり、原爆投下というナショナルな記憶を背負う広島平和記念資料館や長崎原爆資料館とは大きく異なり、「満洲」に関わる2つの博物館は、地域の「記憶の場」として存在してきたのである。内原郷土史義勇軍資料館は、館名に「郷土史」という名を冠していることからわかるように、義勇軍の歴史を、敢えて郷土史の一部として位置づけていることがわかる。このようにすることで、義勇軍だけを際立たせない工夫がなされている(「町長の悩み」に対する回答だったのでらうか)。しかし、国策の要請に応じて志願した全国からの青少年達が集まって暮らしたこの土地の記憶は、ナショナルな記憶のはずである。一方の満蒙開拓平和記念館は、館の活動として、長野出身の開拓民の記憶や語りを継承することに力をいれているが、民間で運営されており、これは地域よりさらに小さい、個人の物語の継承ともいえる。この点について、

27) 金子の論文では、地域とは何かが議論されていないことや、「地域」に対する本質主義的な理解への疑義などについて論が展開されているが、ここでは立ち入らない。

寺沢も「一民間団体が手弁当で史実を継承するのは明らかにおかしい」（朝日新聞 2021.8.31）と、違和を述べている。

こうした差異はあるものの、結果として両者ともに、地域アイデンティティとしての「満洲」を表象する博物館となっている。すなわち、これらの博物館の語る「満洲」は、凶作による貧困から多くが渡満を志願し、開拓民や青少年義勇軍としてその土地から「満洲」に渡っていったという「地域の物語」なのである。しかも、これらの館は、引揚者とその関係者の熱意によって、かろうじてつくられ、存在できているのである。

多くの研究があきらかにするように、「満洲」に関係する人々の属性は実に多様で、その立場によって全く異なる語りを持つ。とりわけ、都市文化を享受した「満洲国」以前の「関東州」（大連・旅順）居住者と、政治的挑戦や開発の物語を持つ「満洲国」の官僚・軍人・会社人と、開拓民という三者の記憶は大きく異なるという（猪股 2012）。また、渡満経験者は、都市住民が圧倒的に多いにもかかわらず、集中的に収集されてきたのは、開拓民の語りだという（坂部 2008）。彼らの多くは、自分の開拓団の村と、その周辺しかほとんど知らないまま敗戦の日を迎えている（西原 2002）。そして、日本の地方の博物館という施設が求められる「地域性」ゆえに、2つの博物館とも、これに呼応するかたちで地方や農村の視点（開拓民の視点）からの施設として位置付けられている。

猪股祐介によれば、現在、引揚者の記憶として語られ、記録されているものは、大きく被害者の物語、開発の物語、ノスタルジアの物語の3つに分けられるという（猪股 2012）。また、これらの3つの記憶のかたちは、現地住民への加害と、日本人内部の加害という2つの加害体験の忘却により成立しているという（同上）。これらの3つの記憶は、会報や回想録、あるいは研究者らによる聞き取りなどといった媒体を通して記録されているが、上記にみた2館の博物館の「地域の物語」としての記憶は、大きくは被害者の物語にくることができよう。これは、館そのものがそのような被害者の語りに重きを置いているというよりも、日本の地方の博物館という存在が、そのような被害の語りを読み

取る文脈の中に置かれているからである。求められているのは、貧しい農村から送出された開拓民や義勇軍の青少年の物語なのである。

このように、農村に対しての都市の記憶、そして開拓民に対してそれ以外の人々（官僚、軍人、会社人、都市居住者）の記憶は、地域の博物館という「記憶の場」では継承されづらいものになっている。同時に、帝国主義を肯定するかのような印象を回避すべく、開発の物語やノスタルジアの物語（猪股 2012）はもちろんのこと、農村と都市ともに存在した、人々の楽しい記憶もまた、博物館という施設においては語られにくいものになっている。

4. 「観光のまなざし」がみた「満洲」—— 中国東北部の都市と博物館

本稿の目的は、出発地となった日本（内地）と、目的地であった中国東北部（外地）という、2つの「記憶の場」について考えることである。そこで、次に、「満洲国」のあった中国東北部に目を向け、そこで現代日本に生きる私たちにとっての「満洲」の記憶がどのような形をとりうるのかについて考えたい。

こうした「記憶の場」に日本からアクセスしうるのは、観光という行為を通してである。観光とは、その地を訪れたゲスト＝観光客が、見知らぬ土地や文化に対してまなざしを投げかける行為を指す（アーリ 1990）。と同時に、観光は、ホストとゲストの緊張関係の中で生み出されていく相互行為でもあり（マキヤーネル 1976）、「満洲」の記憶は、ホストである中国側と、ゲストである日本人観光客の、複雑な力学の中で再構成されていく。当然のことながら、観光の体験は、中国側がどのようにその場を保存しているのか／していないのか、どこまで公開しているのか、そしてどのようにそこでナショナルな記憶を語るのかに規定される。

戦後日本からの「満洲」観光が始まったのは、1972年に日中の国交が回復し、中国が改革開放した1978年からである。このとき、日本からの「満洲」観光の主な主体は、引揚者・渡満経験者やその家族関係者であった。1980年代から90

年代にかけて、中国東北部へのツアーがひとつのブームとなる。これは、「満洲」の記憶を語る媒体がピークに達する時期（猪股 2012、佐藤他 2020）とも重なっており、その背景には、「満洲」観光の空白期に増幅し強化された、彼らの望郷の念と、「集合的郷愁」（高 2000: 27）があった。

高媛は、このような当事者や当事者団体が企画するツアーが彼らに呼び起こすノスタルジアをもとに、旅行会社がその郷愁をパッケージツアー化するようになったことを指摘する（高 2000）。すなわち、引揚者・渡満経験者のノスタルジアをなぞり直すかたちでこそ、現在の「満洲」ツアーは成立するのだという。そして、こうした「『満洲』をめぐる日本人のノスタルジーの射程は、帝国の膨張、支配、崩壊の全過程まで敷衍」し、「半世紀以上置き去りにされていた『帝国の記憶』は、くり返し『満洲』観光の場で商品化されよみがえってくる」（高 2000: 30）のだという。

では、商品化された「帝国の記憶」とはいかなるものだろうか。ここでは、大連・旅順・瀋陽・長春・ハルビンという「帝国」の主要都市の遺構や博物館をみることで、現代によみがえる記憶のかたちをみていこう（ただし、基本的な枠組みを押さえるにとどめ、すべての施設や遺構を網羅することはしない）。これらの都市の遺構や博物館には、「満洲」に対する日本人観光客のノスタルジア、改革開放後の中国政府による観光資源の商品化と愛国主義教育、中国国内の人々の複雑な国民感情とが交錯している。その緊張関係とせめぎあいのなかでこそ、「満洲」の「記憶の場」は、過去から現在へと連続性をもった空間として立ち現れてくる。

(1) 都市の記憶——大連・旅順・瀋陽・長春・ハルビン

大連

日清戦争に勝利した日本は、下関条約によって清国から遼東半島南部（大連・旅順）を割譲されることになったが、ロシア・ドイツ・フランスの三国干渉に

よって、その租借権はロシアの手に渡った²⁸⁾。ロシアが着々と進めていた都市建設によって、ダーリニー（大連）では、円形広場からそれぞれ街路が放射状に延びるようなヨーロッパ風の市街計画と、大規模な湾港施設の整備が進んでいた。その後、1905年の日露戦争の勝利によって、日本がロシアから租借権を譲り受けると、ロシアの都市計画をそのまま引き継ぎ、統治が終わりを告げる1945年までの40年の間に、湾港、駅、病院、学校、百貨店、工場などを次々と整備していった。1940年代の大連の総人口は66万人で、広島や福岡を上回る、日本で10位の人口規模だった（永井 1999）。また、そのうち3割弱が日本人だったことは、植民地都市の中でも特筆すべきことだという（同上）。

もっとも大きな円形広場であった中山広場（図8）には10棟のヨーロッパ風建築が立っており、これらは現在も政府機関や金融機関として使われている。たとえば、当時日本で唯一の外国為替管理会社であった横浜正金銀行大連支店の建物は、現在は中国銀行遼寧分行として使用されている（図9）。また、1914年に開業した、南満洲鉄道株式会社直営のヤマトホテルは、現在でも大連賓館として現役のホテルになっている（図10）。館内のカフェ「大和 喫茶& CLUB」には、夏目漱石をはじめ過去にホテルを訪れた要人の写真等が飾られていた。広場のすぐ近くには当時の満鉄の本社もあり、2007年になって大連満鉄旧址陳列館としてオープンしている（図11・12）。筆者が訪れた2015年12月当時、見学は完全予約制になっており、日本語の通じる専属ガイドに電話をして、当日案内してもらう形になっていた。

しかし、永井良和によれば、日本統治時代の建物の多くは、戦後老朽化してその寿命を全うし、残されたものはわずかだという（永井 1999）。日本が移植した神社や遊郭はもちろんのこと、百貨店、工場、住宅などの多くはなくなり、残されているものは、日本の痕跡というより、西洋的で普遍的な価値を持つ近

28) ロシアは三国干渉の見返りとして、清国から旅順・ハルビン間の鉄道敷設権と旅順・大連の租借権を譲り受けた。

代的な建物である（同上）。そこにはまだ「観光のまなざし」はなく、有用な建物が残り、利用された。

大連は、1978年の改革開放後に貿易・工業都市化が進み、1984年には「沿海開放都市」に指定された。張海燕によると、1990年代以降は観光地化をめざし、2006年には、大連市政府が「観光業の6つの戦略」を策定し、都市ブランドを「ロマンチックな街」に設定した（張 2016）。これは、残された遺構を「観光のまなざし」の対象として位置づけ直すことを意味する。満鉄本社の2007年の公開は、まさにそれを象徴している。

しかし、中山広場をはじめとする歴史的な都市の遺構の観光資源化は、市の思うようには進んでいないという。そこには、これまで生活の中で利用してきた施設を日本の植民地遺産として観光資源化することに対する国民感情という事情以外にも、安定しない観光客収入という実態があるようだ。張によれば、日中関係悪化で日本人観光客が激減しはじめてから、大連市による歴史的建造物の取り壊しや放置が目立つようになったという（同上）。

実際、2013年には、1924年に日本によってつくられた大連港の乗船待合所の玄関ビル（図13）が取り壊された。また、筆者が訪れた2015年には、日本統治時代に内地からの「満洲」観光コースの見学先にも含まれていた満蒙資源館は、取り壊しの途中で放置されていた（図14・15）。1925年に開館した満蒙資源館は、満蒙を日本の資源の要と捉える石原莞爾の思想を体現しており、日本の全国的な博物館組織である日本博物館協会²⁹⁾の会報でも、当時頻繁に紹介されていた施設である（写真16）。また、建物自体は、1900年頃にロシアによってつくられ、帝政ロシア時代は東清鉄道事務所から市役所になり、日本統治下では満鉄本社、ヤマトホテル、満蒙資源館、さらに戦後は東北資源館、大連市自然博物館（～1997年）として使われた、貴重な歴史的建造物だった。

一方、旧ロシア人街の街並みや、旧満鉄幹部の社宅街などは、完全に取り壊し

29) 1928年に博物館事業促進会として発足。1931年に改称。

「記憶の場」が再構成する「満洲」(村田)



図8 中山広場の当時の様子。
出典：『大連舊景』



図9 中山広場でもっとも目立つ旧横浜正金銀行大連支店。



図10 旧ヤマトホテル。館内のカフェ兼クラブにはカラオケセットや大量の日本酒ボトルキープがあり、現在でも日本からのビジネスマンが多く利用している。



図11 大連満鉄旧址陳列館。現在、大連鉄道局が所有している。



図12 2007年に満鉄100周年を記念してホールへの復元と開放が行われた。



図13 大連港の乗船待合所の玄関ビルの当時の様子。出典：『大連舊景』



図14 旧満蒙資源館。戦後は東北資源館、その後大連市自然博物館として利用されていた。



図15 1997年の大連自然博物館の移転に伴い、建物の表側以外は取り壊され、そのまま放置されていた。



図16 『博物館研究』（第14巻3号、1941年）に掲載された満蒙資源館。満鉄満洲資源館長・新帯國太郎による「満蒙資源館の使命」には、「満洲の資源及産業の全般に対する現品、標本並に夫等の加工品其の他の参考資料を蒐集調製し」、「一面又、満鉄会社々業の参考に供し、他面には一般民衆の科学的知識の普及向上に資せんとする」とある。



図17 旧ロシア人街は取り壊され、2002年に新しい観光名所「大連ロシア風情街」として復元された。

て雰囲気を模倣したものに復元されており(図17)、安易な観光化を目的とする植民地時代の市街地の破壊に関しては、中国国内の専門家たちからも懸念の声が上がっているという(張 2016)³⁰⁾。

旅順

旅順は、軍港都市のために開放が遅れ、1996年ようやく国外の企業や観光客に開放されることになる³¹⁾。早くも日露戦争終結の翌年から始まっていた日本人の旅順観光は、戦後50年以上という長い空白を経て、再び可能となったのである。

日本の敗戦後、ソ連は「満洲国」の大都市を接収管理し、旅順にも進駐した。ソ連軍は駐留期間に、白玉山納骨祠や戦利品陳列館、水師営会見所などを含む日本が建設した日露戦争関連記念建造物を破壊したという(高 2006)。その後、文化大革命の時代に再び大規模な破壊に見舞われ、閉塞隊記念碑や「乃木保典君戦死之所」碑等が壊されたり、二〇三高地の銃弾型記念塔の乃木希典の筆跡による「爾靈山」の文字が削り取られたりした(同上)。1978年以前の中国においては観光自体がブルジョア的と忌避され、いわゆる観光資源は荒れるままに放置されているのはよいほうで、大躍進時代や文化大革命時代には、破壊こそが正しい共産主義者の行動だったからである(松村 2000)。

1996年に部分開放されたとはいえ、その際に日本人観光客の自由観光が許されていたのは、二〇三高地、東鷄冠山北堡壘、水師営会見所の3カ所のみであった。2009年になって旅順口区³²⁾は、ようやくすべての外国人に全面的に開放

30) 張海燕によれば、2010年から地元の「大連日報」に、植民地時代の遺構の破壊に関する長期連載が始まり、その多くは歴史家や建築家たちが商業目的の街並み破壊を批判したり、遺構の歴史的価値の再評価を訴える内容だったという(張 2016)。

31) 1988年に「国家重点風景名勝区」に指定され、国内客や海外の華人華僑客をまず受け入れ始めた。さらに1992年には大連市政府は「旅順経済開発区」に着手し、中央政府に外国への開放を働きかけた。

32) 旅順市は大連の行政区分変更にともない、1960年には市から行政区(口区)に降格した。1981年には「大連市旅順口区」となった。

され、軍事区域以外は自由に入れるようになった。

高媛は、「観光開放時代において、日本人観光客のまなごしが介在することによって、『国恥』とされていた日露戦争跡が『観光資源』として掘り起こされるにいたる」（高 2006: 46）過程について考察している。それによると、二〇三高地と東鶏冠山北堡塁は、1980年代後半から観光のために整備され、1985年には一連の日露戦争戦跡が市の重要文化財に認定された。また、1988年には白玉山塔の横に海軍兵器館がつくられ、95年には白玉山塔と東鶏冠山周辺の緑化事業が行われたという（図18～22）。

さらに、水師営会見所は、日中の政財界の強い関係を背景にして、実際の場所とは異なる場所に、新たに復元された観光地である（図23）。実際の水師営会見所は、戦後ソ連により取り壊され、その後建物は農協の倉庫として使用されていたという（図24）。復元された水師営会見所は「愛国主義教育基地」に指定されているが、国内観光客のコースにはほとんど入っていないという。その状



図18 二〇三高地の爾靈山記念碑。日露戦争後に乃木希典が山頂に弾丸型の記念碑を建立して、戦死者を弔ったもの。削り取られた文字が復元されている。



図19 東鶏冠山北堡塁。日露戦争時のロシア側防御要塞跡で、1900年から4年かけてつくられたトーチカ。

「記憶の場」が再構成する「満洲」(村田)



図20 白玉山景区は、国家級旅游景区AAAAに指定されている。



図21 白玉山塔。日露戦争後に東郷平八郎(連合艦隊司令長官)と乃木希典(陸軍第三軍司令官)が日本兵慰霊のために建てた塔。



図22 1988年につくられた海軍兵器館。メンテナンスはされていないようだ。



図23 水師営会見所。ステッセルと乃木希典が会見し、旅順での戦闘が終了した。これは完全に復元された観光地。
出典：www.chinatrip.jp



図24 実際の現場となった水師営会見所。筆者が訪れた2015年には既に右半分は破壊され、残りも廃墟となっていた。

況を、高は、国家イデオロギーの枠組みを「隠れ蓑として、それを空洞化させる形で、実質的には、日本人観光客の嗜好に合致させる観光スポットして形成されている」（高 2006: 55）と分析する。上述の中国政府による旅順の徹底した観光化政策からもわかるように、「満洲」の記憶の再構成には、「観光のまなざし」を投げかける日本人観光客の存在が不可欠となる。「帝国の記憶」に対する中国側の愛国主義教育と観光資源としての商品化は、前者が后者の「隠れ蓑」になっているという意味において、矛盾するというよりも、セットで存在しているといえよう。

ちなみに、『地球の歩き方』³³⁾には、「80年前にタイムスリップ？ 旅順歴史MAP」と称したコーナーが掲載されている。ここには1936年に発行された「旅順戦蹟案内圖」と、現在の観光スポットが重ねられており、「区画は当時とほぼ変わらず、重要な建築は今も使われていた」（pp.60-61）とある。ゲストとホストの共犯により、断絶と不連続の歴史は、かき消されてもいる。さまざまな思惑と視線が交錯するなかで、過去と現在は地続きとなり、「記憶の場」は更新されてゆく。

【コラム1】旅順博物館と、「満洲国」博物館事業

旅順博物館は、「満洲」の歴史を見守ってきた博物館である。1917年、ロシア将校倶楽部の建物を改築して関東都護符満蒙資源館がつけられたのがその始まりだ（1919年には関東庁博物館と改称）。満蒙資源館（図14・15）同様、満蒙の豊富な資源を調査し、内外の人にアピールするためにつくられたが、こちらは文物に特化しており、中でも大谷探検隊が中央アジア全域から



図25 旅順博物館。

33) 2015～16年版、2019～2020年版共に掲載されている。

「記憶の場」が再構成する「満洲」(村田)

収集したコレクションは有名だ。館は日本統治時代には「後楽園」と呼ばれた庭園の横にあり、のちに付属動物園も新設され、こちらは「虎、豹、其の他の満洲特産動物」(『博物館研究』(第2巻1号、1929年、p.10)をみせることが目的だった。その後、1935年に瀋陽(奉天)に「満洲国」国立博物館(現在の遼寧省博物館)が開館するのを受けて、旅順博物館と改称された。

このような当時の「満洲国」博物館事業は、満蒙の資源を整理し、展示して国内外の人々にアピールするための重要な事業であった。本稿では展開できなかったが、詳細については大出2014と犬塚2015を参照されたい。

なお、旅順博物館は、戦後1945年にはソ連軍が東北博物館と改名、中国政府に1951年に移管され、54年には再び旅順博物館になる。その後文化大革命期の閉鎖を経て、ようやく1972年に開館した。



図26 戦後の閉鎖を経て1972年に再び開館した。現在の美しい館内の様子は、当時に近い状態に再現されている。



図27 『博物館研究』(第15巻9号、1942年)に掲載された旅順博物館。主事の島田貞彦は「とにかく関東州の古代に於て、石器時代以降漢治時代を通じ、満洲に於ける優秀な文化遺産を残していることは、全く此地の特殊性に基くものであって、我々は、此地の考古学的資料に基いて、東亜古文化波及の拠点として、これを再認識するのが要であると思ふ」と述べ、大谷探検隊の持ち帰ったミイラ(木乃伊)や、満蒙地域の豊富な遺物について紙幅を割いて解説している。

瀋陽

旅順・大連から、高速鉄道で北上すると、瀋陽、長春、ハルビンという3つの省都をたどることが出来る。この鉄道は、帝政ロシアが清国から1895年に鉄道敷設権を獲得し、「満洲」の平原を東西に切り裂いて敷設した東清鉄道の南への支線（南満洲支線）である。その拠点都市として、ハルビンやダーリニー（大連）の都市建設があわせて進められた。しかし、日露戦争を経て、日本が長春以南の鉄道と鉄道附属地³⁴⁾の租借権を手に入れ、ここに南満洲鉄道株式会社が誕生するのである。

満鉄は国家予算の半分規模を資金源とする巨大な企業であるばかりでなく、実質的には「満洲」侵略に向けた国策を支える機関として機能していた。日本政府は、瀋陽（当時は奉天）に満鉄最大の鉄道附属地を設置し、市街地を建設した。奉天駅（図28）は、満鉄創業時に新築された駅では最大のもので、日本銀行本店や東京駅などを設計した辰野金吾にちなんで「辰野式」と呼ばれ流行した建築様式が採用された（西澤 1996）。1625年に後金（清朝）の都となったこの地は、満洲族の故地であり、日本政府にとっては「満洲」支配を進めるための重要な場所だったのである。実際、満洲事変はこの瀋陽（奉天）から始まっている。

瀋陽故宮は、その遷都とともに創設され、清王朝の基礎を築いた太祖ヌルハチと、第2代皇帝の太宗ホンタイジが実際に住んだ宮殿である（図29）。1911年に清王朝が滅び、辛亥革命を経て中華民国が誕生すると、中国北部は軍閥割拠の時代に入る。奉天では、軍閥の一人張作霖が実権を握り、奉天城一体を支配していた。日本は、「満洲」での権益を守るために張作霖との関係を強めるものの、やがて思惑の違いにより決裂し、邪魔になった張作霖を爆殺した。事件を

34) 線路を中心とした約62mの用地、駅舎、その周辺の土地をあわせたもの。西澤泰彦によれば、帝政ロシアが満洲の地に東清鉄道を敷設する時に編み出した支配形態であり、日本がロシアの鉄道附属地を譲り受けたことで、鉄道の保護目的として満洲における兵力の駐留を正当化できた（西澤 1996）。

「記憶の場」が再構成する「満洲」(村田)

知った息子の張学良は、国民政府と手を握り、抗日政策に動いた。奉天城の城壁内にある張氏帥府博物館は、張作霖と張学良の官邸兼私邸であり、館内には彼らの業績や、日本との関係史が展示されている(図30・31)。また、城壁内には張家ゆかりの建物が今も残り、日常に溶け込んでいる(図32・33)。

1931年、関東軍は満鉄の線路を自ら爆破して柳条湖事件(九・一八事件)を引き起こし、これを足がかりに、日本はいっきに「満洲」侵略を推し進め、1932年には「満洲国」を打ち立てる。その柳条湖の事件現場には、60周年を記念して、1991年に九・一八歴史博物館がつくられた。館内には、抗日の歴史が大量の写真やジオラマを用いて展示されており、日本の「蛮行」と、それに抗った「英雄」たちの物語がドラマティックに語られている(図34~36)。



図28 当時の奉天駅の様子。
出典：『偽“満洲国”明信片研究』



図29 瀋陽故宮博物院。崇政殿はホンタイジが日常の軍務や政務を行った場所。



図30 張氏帥府博物館。1914年に建設され、敷地は2561m²を超える大青楼には、執務室や会議室などがある。



図31 張氏帥府博物館の展示の様子。



図32 東三省官銀号は張家の機関銀行だった。現在は中国工商银行。



図33 吉順絲房百貨店。奉天城内一の高層建築として、1925年に四平街（現中街）につくられた中華バロック建築。既に1936年の満鉄の観光案内パンフレットにも登場する観光地だった。現在は瀋陽市第二百貨商店。



図34 九・一八歴史博物館。



図35 導入の解説には「日本帝国主義は長期的に中国東北地方を不法占拠するため、溥儀を始めとする売国奴を集め、中国にある日本の傀儡政権である偽りの満州国をでっちあげた」とある。



図36 「東北地方における軍民の抗日戦争」コーナーの展示には力が入っている。

長春

「満洲国」を打ち立てるために清朝最後の皇帝である愛新覚羅溥儀を担ぎ上げ、執政させた場こそが、「満洲国」首都の長春(新京)³⁵⁾である。ここには、溥儀が執政を行った宮殿(現偽満洲宮博物院)(図37・38)以外にも、「満洲国」の最高行政機関であった國務院や、現在「満洲国」八大部遺跡と呼ばれる、軍事部、司法部、經濟部、外交部、文教部、交通部、興農部、民生部の建築等がある(図39~43)。1948年以降、中国人民解放軍と地方政府の直轄になり、建築物は「有用性、すなわち『使用価値』」(周 2011b: 140)があるものとして、学校、大学、病院などに使われていた。大躍進時代や文化大革命時代には、こうした「満洲」の遺構は一部破壊されたり、博物館の収蔵物が流出したりしたが、1978年に改革開放が始まり、1982年に「中華人民共和国文化財保護法」が交付されると、長春市の遺跡は次々に文化財保護リスト化されていった(周 2013)。また同じく1982年には偽満洲宮博物院の回復が宣言され、1986年には映画『ラストエンペラー』(監督 ベルナルド・ベルトルッチ、1987年)を連合撮影するために、中国、イタリア、イギリスの映画監督と技術スタッフが来館し、観光



図37 偽満洲宮博物院は、国家AAAAA級の観光地と、優秀な愛国主義教育基地になっている。勤民楼では公式行事が行われた。



図38 同徳殿のホールは映画『ラストエンペラー』にも使用された。

35) 日本は「満洲国」の首都として「新京」と名付けたが、終戦とともに「長春」に戻された。



図39 旧関東軍司令部は、現在では中国共産党吉林省委員会が使用している。



図40 偽満州国国務院旧址。現在は吉林大学基礎医学院。



図41 偽満州国交通部旧址。現在は吉林大学公共衛生学院。



図42 偽満州国綜合法衙。現在は中国人民解放軍第四六一病院。



図43 「満洲国」八大部遺跡には、すべてこのような碑が建てられている。

「記憶の場」が再構成する「満洲」（村田）



図44 長影旧址博物館。かつての満洲映画協会の面影を残す建物正面。



図45 満映は1937年に設立された国営の映画会社で、戦後は中国共産党に引き継がれた。

客向けの展覧会も開催された（周 2011b）。1988年には、「満洲国」八大部遺跡は、「全国126景観」のひとつとして「中国国家級景観区」に指定され、観光資源化されたという。このように、1978年以降、日本人観光客向けの観光資源としてこれらを位置づけ直していく様子は、旅順の場合と同じである。

現在の長春は、偽満皇宮博物院や、長影旧址博物館（図44・45）というわかりやすい観光施設よりも、文化財指定された官庁街そのものが、「観光のまなざし」の対象である。古賀由起子は、このような街を「生きたテーマパーク」（古賀 2004: 44）と呼び、年々増加傾向にある、長春を訪れる日本人にとって、「このかつての満州の首都はまさに、消滅した帝国の遺物という考古学的発見であり、また同時にリアルタイムの満洲国テーマパークとなっている」（古賀 2004: 40）と、「帝国の記憶」の場として位置づけている。さらに、ミシェル・ド・セルトーの枠組みを用いて、長春の都市空間を次のように説明する。

ここで（…）昭和天皇の身体の建築的表現である帝冠式の建物が、アナログで時代錯誤な形をとって、かつて満洲国の首都『新京』と呼ばれた中国東北部の都市長春で日本人観光客の目前に再び現れていることに注目するべきであろう。建築様式は、それぞれの時代の思想や欲望を映す鏡である。しかし同時に、建築形式に表現され内包される意味は、こうした建築物が

ある一定の都市空間の中に配置され、利用されていく過程で、その記号論的意味を変化させていく。(古賀 2004: 43)

ここで言う記号論的意味の変化とは、かつて天皇制の権威を意識した帝冠式でつくられた「満洲国」八大部が、その後の利用によって、中国共産党の権威へと意味をスライドさせていることを指す。さらに、改革開放後、長春政府は、「満洲国」の遺構の保存を決定し、これらに「偽満洲国」という冠をかぶせながら、その由来を明記した石碑とともに、すべて愛国主義教育の一環として保存することを決める。そして、そのような大きな物語を冠して観光資源化しつつも、政府の重要組織の建物として、したたかに再利用していくのである。日本人観光客の「観光のまなざし」が再構成する「満洲」は、こうした中国の観光戦略ゆえに、可能になっている。

ハルビン

鉄道をさらに北上すると、「満洲」最北の大都市、ハルビン駅につく。

ハルビン駅といえば、伊藤博文が韓国人の安重根に暗殺された駅である。1909年、韓国併合の手筈を整え、ロシアの了承を得るために、大連から旅順、奉天、長春を通してハルビンにたどり着いた伊藤は、構内で安重根が撃った3発の銃弾に倒れた。構内には安重根義士記念館があり、ガラス越しに駅構内の射殺現場をみることができる仕掛けになっている(図46・47)。安重根を英雄として展示することに対する韓国側の様々な働きかけに対して、中国政府は2014年に突然応じ、この記念館をつくったという(産経新聞 2013. 7. 19、ハフポスト 2014. 1. 20)³⁶⁾。このように日本だけでなく、他の近隣諸国との複雑な関係性もまた、観光資源には反映されている。

ハルビンは、帝政ロシアがつくった都市である。早くも1898年に東清鉄道の

36) その後駅の改装で取り壊されていたが再び2019年に開館した。



図46 安重根義士記念館。



図47 記念館から、伊藤博文が撃たれた駅の構内が見える形になっている。

建設とあわせて都市計画がはじまるが、これは帝政ロシアにとっても、首都ペテルブルク以来の本格的な都市建設であったという(西澤 1996)。1920年代、ハル

ピンはロシア人、欧米人、中国人、日本人が行き交う東アジアきっての国際都市となった。関東軍は「満洲国」を成立させた1932年以降、管轄外の北満にまで進出し、ハルピンを支配下においたが、他の都市に比して、街作りへの影響力は少ない。

現在のハルピンは、帝政ロシアの建築を中心に、中国や日本の建物を残し、さながら建築テーマパークのようである。かつてキタイスカヤと呼ばれた中央大街は、商店や銀行の建ち並ぶ当時の街並みをそのままに留めており、ハルピン市政府によって保存街区に指定されている。その象徴的存在のモデルンホテルは、1913年に、キタイスカヤ(中央大街)の真ん中に建てられた。また、旧秋林洋行は、ロシア人がハルピンで作った百貨店で、「満洲国」時代には、日本に経営が渡り、現在は中国資本になっている(図48)。街中には、多くの教会や寺院もつくられ、中でも1907年に帝政ロシア従軍教会としてつくられた聖ソフィア大聖堂は、目を引く(図49・50)。

さらに、ロシア人との商売のために、近くには中国人が多く集まっていた。



図48 旧秋林洋行。ロシア人のイヴァン・チューーリンがハルビンで作った百貨店で、その後他都市にも進出した。



図49 聖ソフィア大聖堂。1996年に、教会内は展示施設となり、市内の建築物の写真、模型などが展示されている。



図50 聖ソフィア大聖堂・ハルビン建築芸術館。



図51 同義慶百貨店。1920年に、中国人街の傅家甸の目抜き通りにつくられた中華バロック建築で、現在は病院（純化医院）。傅家甸には、当時の中国人技師が西洋建築を模してつくった、一般の建築史の知識では理解しがたい様式の建物が多く、この建物も例外ではないという（西澤 1996）。



図52 傅家甸の裏通りは洋風建築が続くが、そのほとんどは激しく損傷・劣化しつつけながら、市民の生活に溶け込んでいる。



図53 「中華バロック歴史文化区」として再開発中の南頭道街。

傅家甸は古くから中国人が居住していた地区であり(当時は厳密にはハルビンに含まれなかった)、いわゆる「中華バロック」といわれる様式が残る(図51・52)。そのなかの一筋、南頭道街は「中華バロック歴史文化区」として再開発され、かつての建物を修復・復元している(図53)。

一方で、ハルビンと北満一体は、抗日義勇軍の活動の拠点にもなり、数々の戦闘が繰り広げられた場所でもある。ハルビン市内の東北烈士紀念館は、抗日運動に身を投じた英雄達をたたえる記念館になっている。また、「帝国の記憶」という観点からいえば、ハルビンは「人間の盾」と言われた開拓団や義勇軍が入植した北満地域にもっとも近い満鉄の大都市でもあった。しかし、ここから鉄道で北上しても、「記憶の場」はほとんど残されていないという。かつて開拓民が入植した中国農村部にいた現地の住民は、中国政府が戦後の新国家樹立後にほとんど移動させ、当時の様子を知る人はほとんどいない(小林 2005)。2015～16年版の『地球の歩き方』のコラム(p.243)には、かつての開拓団入植地に出かけたレポーターがみつけた当時の貴重な家屋についての体験記が載っていたが、2019～2020年版のコラムには、そのような具体的な痕跡の記述は削除され、代わりに日本人公墓の存在で締めくくられている。この公墓は、「満洲」で唯一の日本人公墓で、1963年に方正に建立されたものである。方正県周辺でなくなった4,500柱の日本人遺骨が葬られているという(寺沢・三沢編 2015³⁷⁾)。また、本稿の「3.1」で言及した水曲柳開拓団の墓地跡地周辺も、今では一面トウモロコシ畑になっている様子が記事からわかる(南信州新聞 2019.9.6)。現在の中国東北部にころうじて残された「帝国の記憶」が、都市の記憶であることもまた、我々は自覚しておく必要があるだろう。

37) 図録には、寺沢が2014年に開拓団の入植した方正と木蘭を視察する様子が収められている(pp. 52-55)。

【コラム2】ハルビンと「聖地巡礼」

ハルビンという街は、2014年に日本漫画家協会賞優秀賞を受賞した、村上もとかの『ファイチン再見!』（『ビッグコミックオリジナル』小学館、2013年3月～2017年3月連載）を通して、比較的若い世代にも知られるようになったのではないだろうか。女流漫画家上田トシコのたくましい生き様を描く本作品には、日本統治下のハルビンの街並、松花江の様子や厳しい自然、ロシア人や中国人と交流があった当時の暮らし、満鉄という会社の様子、そして1945年の壮絶な逃避行などが登場する。今後の記憶の継承には、引揚者のノスタルジア以上に、マンガやアニメ等ポピュラー文化の「聖地巡礼」という観光形態が、大きな役割を果たすかもしれない。



図54 村上もとか『ファイチン再見!』第1巻。

(2) せめぎあう「記憶の場」

既に何度か言及しているように、「満洲」に日本人観光客による「観光のまなざし」が投げかけられたのは、戦後が初めてではない。既に日本の「満洲」支配が企てられた日露戦争直後から、日本人観光客が出かけている。先述した夏目漱石も、1909年に、50日間かけて「満洲」と韓国を旅行している（その体験の一部は「満韓ところどころ」という紀行文として当時の『朝日新聞』に掲載された）。

高媛によると、1930年には、国際観光局が初の官設中央機関（鉄道局の外局）として創設され、実質的な対外観光宣伝を担う国際観光協会（1931年設立）と、観光客の斡旋を手掛けるジャパン・ツーリスト・ビューロ（1912年設立、現在のJTB）に支えられながら、国際観光を国自らが振興したという（高 2002b）。

これは、日本の帝国拡張の時期とピッタリと重なっており、「満洲」観光は、「外地」をつくるまなざしの中でこそ生まれていることがわかる。とりわけ、欧米列強からの圧力を受けるなかで、自らの帝国主義者としての正当性を主張するための、重要な国策であった（実際、西洋人に向けた「日本」観光として「満洲」観光が推奨された）。すなわち、「政治色の強い『王道楽土』³⁸⁾の建国理念よりは『観光楽土』としての満洲が、格好な『展示場』として選ばれたのである」（高 2002b: 137）。

これら戦前の「満洲」観光に焦点をあてた論文は、高媛や荒山正彦らの研究を中心に一定数存在し、その多くは当時の鉄道会社（満鉄）や旅行会社などの発行する観光パンフレット、旅行年鑑、その他旅行の記録等を分析し、当時の観光の詳細をつまびらかにするものである。千住一は、日本統治地域における観光現象というテーマの研究が2000年代に入ってからの新しい研究であり、それまでは等閑に付されていたことを指摘する（千住 2012）。おそらく、1978年の開放後、実際に「観光地」としての中国が思考可能になるなかで、初めて過去の観光が掘り起こされはじめたのである。

これらの研究があきらかにした重要な点は、「満洲」が戦前から日本人の「観光のまなざし」を投げかける都市として存在してきたという事実である。荒山正彦が述べるように、「満洲」観光は、そのピークを迎える1930年代にはすでに定式化・パッケージ化されていたのであり（荒山 2003）、大連の近代建築ツアー、旅順の戦跡や忠霊塔ツアー、奉天（瀋陽）の清王朝の歴史的建造物と近代施設の組み合わせツアーといったパッケージングは、枠組みとしてはそのまま現在に引き継がれている³⁹⁾。当時の「満洲」観光の主体は内地の日本人だけではなかったし、「満洲」単体の観光のみならず「植民地間の移動を前提とし」た、「鮮満／満韓という観光のありよう」（千住 2012: 91）があったことについても忘

38) 「王道楽土」「五族協和」は「満洲国」のスローガンだった。

39) 荒山2008に、南満洲鉄道株式会社（満鉄）が1935、36年に発行した「満洲旅行案内」から抽出した見学先一覧が示されている。

れてはならないが、戦前に多くの日本人の「満洲」イメージを形成した観光ルートやガイドブック類が、21世紀の「満洲」観光ルートの基礎をつくり、引揚者のノスタルジア（とそれを誘致したい中国側の観光政策）を媒介として、現在なお多くの場所が観光スポットとして踏襲されているという事実をここで確認しておくことは重要である。

つまり国策としての「満洲」と、観光地としての「満洲」とは相似形だったのであり、「満洲」そのものが日本からのまなざしが照射されることで「成立」していた枠組みだったことを考えれば、それを見せる目的でつくられた観光ルートもまた、それを凝縮したものにすぎない。そのまなざしは戦後長らく凍結されていたが、引揚者たちのノスタルジアを通して80年代以降再び復活し、継承されている。

しかし、一方で、現在の「満洲」観光が、日本の帝国のまなざしそのものかといえば、そうではないこともまた、ここまでの考察であきらかになった。観光は、ホスト側の視座が強く働いており、とりわけ中国においては、その力学は、観光地の選別や、観光客の出入りが許される場所などに細かく反映されているからである。松村嘉久は、「中国のように国家権力が観光事業を推進する国家の場合、観光対象がイメージや記号が付加される際に、国家権力が主導的に介在し、見せようとする側の価値観が強く関わってくる」（松村 2000: 2）ことを指摘し、アーリが概念化した「観光のまなざし」も、欧米のそれとは異なる形で検討されるべきことを示唆している。すなわち、ゲストのまなざしが観光を構造化していくとしても、中国においては、そこに留保も必要だということである。

松村は、中国において、1978年を境に改革開放がはじまり、1980年代から1990年代にかけて、「観光資源」が再発見され制度化されるなかで、見せようとする側の価値観が大きく転換したことを指摘する。そして、そこには外国人観光客に対して「中国をいかに見せるのか」という対外的な姿勢が絡んでいるという。「帝国の記憶」の商品化（高 2000）は、こうした状況下でこそ実現してきた。

さらに、坂部晶子があきらかにするように、中国における博物館等の文化施設は、1980年代以降、残された日本支配の痕跡を示す建造物や遺構を利用するかたちで意識的かつ積極的につくられ、それらは中国内の愛国主義教育を促進する役割をも担っている（坂部 2004、2008）。坂部は、中国における抗日の場の構成について検討し、1940年代末～1960年代半ばが抗日烈士たちの墓所の建設、1960年代半ば～70年代が万人抗の掘り起こしと展示施設化であったのに対して、1980年代以降は、博物館という、より物語性が強く、歴史や時間軸を踏まえて語れるような近代的な手法を使うようになったという。それにより、国内の人々に向けた愛国主義教育を、国際的にも通用するような、より客観的な語りに変え始めた。坂部の挙げる侵華日軍第七三一細菌部隊罪証陳列館、偽滿皇宮博物院、九・一八歴史博物館以外にも、旅順日露刑務所旧址、旅順日露戦争陳列館、関東軍司令部旧址陳列館、大連満鉄旧址陳列館、東北淪陷史陳列館（図55～57）、安重根義士記



図55 東北淪陷史陳列館。日本による中国東北部の占領をテーマとする博物館で、偽滿皇宮博物院の付属館として2006年開館した。



図56 「大規模移民」としての満蒙開拓団の入植、日本の駐屯兵の蛮行、それによる中国農村の被害や虐殺が展示されている。このジオラマは平頂山大虐殺（撫順市）の様子。



図57 満蒙開拓団が入植した際に立てた看板。

念館なども、そうした文脈のなかで続々と博物館化されていったものである。当時の建造物を利用したものや、当時の現場につくられたこれらの博物館を見学することで、中国側からみた「満洲国」=偽満洲の位置付けも、日本人観光客として知ることを可能にするのが、博物館という装置である。

一方で、張2016、周2011a・2011b、高2006等にも指摘されているように、中国にとっての「国恥」の象徴となる場所や建築物の数々を残すことに対する抵抗や反発もあり、中国の観光政策が仮に共産党の強力な意向で最終的には決まるにせよ、こうした声があることは、「記憶の場」の在り方に少なからぬ影響を与えている。たとえば、長春の八大部遺跡をめぐるのは、1988年に「全国126景観」に指定されると、1990年代には、そうした観光資源化に対して否定論⁴⁰⁾、肯定論に分かれての論争が起きたという（周 2011a、2011b）。

また、先述したように、多くの建物は中国の日常の中で再利用されており、むしろ中国は良質の建物は出自に関わらず再利用するしたたかさを持っている。とりわけ先に見た長春の町並みは、それを象徴しており、関東軍の権力を誇示していた帝冠式の建物の数々は、いまや大学、病院、共産党施設となり、中国の権威機関へとスライドしている。しかも、こうした様式にそるえる形で新しい建物を建て⁴¹⁾、町並みを揃えている。一方で、ハルビンの旧中国人街などでは、市民がそのまま暮らしており、生活に溶け込んでいる一方で、劣化と損傷は進行するに任せてあり、遺構を保存しようという気配はない（再び図52）。

つまり、都市は、日本から投げかけられる「観光のまなざし」と、中国の思惑（観光資源の利用と愛国主義教育）、さらに中国国内の国民感情とが、せめぎあう地点だからこそ、「生きた」記憶になる。観光とは、ホストとゲストのせめ

40) 否定論のなかには、愛国教育基地としてはよくても「満洲国」の観光化には反対という意見、そもそも傀儡政権の象徴を保存することに対する反対する意見があった。

41) 古賀2004には、「長春日報」の新社屋に旧司法部のモチーフが取り入れられていること、また旧国務院に隣接する高校に同じモチーフが使われていることが指摘されている（古賀 2004の図7、8参照）。

ぎあいであることは、既にアーリヤマキャーネルがあきらかにしてきた。現代日本に生きる私たちが「満洲」の「記憶の場」を訪れることは、ノスタルジアを再構成すると同時に、脱臼させる力学にも作用する。歴史ではなく、「生きた」記憶としての可変性こそが、記憶の継承の最大の手法であるといえよう。

5. さいごに：博物館と都市の観光による記憶の継承

本稿は、21世紀における「満洲」をめぐる記憶の継承について、「記憶の場」としての博物館や都市の観光を通して考察してきた。具体的には、日本人の「満洲」移動に関わる、日本(内地)と「満洲」(外地)という、2つの「記憶の場」から、これらの場所を通じて再構成される「満洲」と、その記憶のあり方について考えきた。

日本国内の博物館と、中国東北部の都市の遺構——この両者を比較すると、記憶の主体は大きく異なっている。都市と農村、官と民、軍人・軍属・商売人の記憶と農民の記憶が、それぞれ異なる「記憶の場」を持っていることがわかる。また、これらは非対称で、断片的で、必ずしも厳密な意味で当時と連続しているわけでもない。

日本国内における「満洲」の「記憶の場」としての博物館は、長野県下伊那郡阿智村にある満蒙開拓平和記念館と、茨城県水戸市内原町にある内原郷土史義勇軍資料館の2館である。「3.3」で詳しくみたように、国策である「満洲」をテーマとする博物館が2館しかないこと、そのうち1館は活発に活動しているが民間による運営を余儀なくされ、もう1館は郷土史の名を冠してひっそりと存在していることは、日本における「満洲」忘却への願望を表している。その結果、これらの2館は、ナショナルな記憶ならざるものとして、地域の記憶として表象されている。しかし、仮にそのような位置にあるとしても、これらは間違いなく「満洲」の記憶を想起する場所であり、我々がこれらの「記憶の場」に足を運ぶその実践によってこそ、記憶は継承・更新されうる。

一方、中国東北部にあるのは、上記とは対照的に、都市の記憶、公の記憶である。中国政府の愛国主義教育と観光化への思惑、そして日本人観光客の「観光のまなざし」との共犯関係により、かろうじて「記憶の場」が成立しており、それを巡ることが出来る。一方で、中国農村部における開拓民の生活や、現地の中国人との緊張関係が語られる「記憶の場」はもはや中国には存在しない。かろうじて、トウモロコシ畑の中のつつましい共同墓地がそれを物語るのみである。

このように、「記憶の場」が保持する「満洲」の記憶は、もはや永遠に未完成なパズルのピースでしかないが、博物館や都市の遺構の観光は、そのピースを拾い集め、完成図らしきものに向かって想像をめぐらせることを可能にする作業である。そして、それこそが、記憶の継承に求められている作業ではないだろうか。安川晴基が述べたように、記憶とは「想起の行為が遂行される現在に関心が向けられる」（安川 2007: 560）営みであり、それゆえに、過去と現在をつなげるのである。

井出明は、ダークツーリズムの意義は、近代の構造的な理解を可能にすることだという（井出 2018）。また、記憶の当事者が、必ずしも当時の状況を俯瞰的にみられているわけでは決してなく（むしろ逆に、当事者は全体状況よりも、個人的な生活の場に注視する）、当事者でない世代だからこそ可能になる俯瞰的な見方や、記憶の継承の方法があるのではないかと述べる（井出 2016）。その際、「記憶の場」とは決して所与のものではなく、そこを訪れようとする者の意志や行為があってこそ成立する。そして、このような新しい記憶の継承者こそがまた、膨大な書籍や映像で語られている個人の物語にも耳を傾け得る素地をもつのではないだろうか。公共空間や公共施設という開かれた「記憶の場」が記憶の継承に果たしうる意味は、今後ますます大きくなるだろう。

参考文献

- アスマン、アライダ著・安川晴基訳『想起の空間：文化的記憶の形態と変遷』水声社、2007
(原著は1999)
- 荒山正彦「戦跡とノスタルジアのあいだに：『旅順』観光をめぐる」『人文論究』50(4)、関西学院大学、2001
- 荒山正彦「満洲観光の軌跡——20世紀前半期における中国へのまなざし」『さまざまな角度からの中国論』阪倉篤秀編、晃洋書房、2003
- 荒山正彦「リーフレットからみる満洲ツーリズム」『近代日本の視覚的経験——絵地図と古写真の世界』中西僚太郎・関戸明子編、ナカニシヤ出版、2008
- アーリ、ジョン著・加太宏邦訳『観光のまなざし——現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版会、1995(原著は1990)
- アルヴァックス、モーリス著・小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社、1989年(原著は1950)
- 井出明「『満蒙開拓平和記念館』を訪ねて——長野県阿智村の記憶」『DARK tourism JAPAN 産業遺産の光と影』ダークツーリズム・ジャパン編集部編、東邦出版、2016
- 井出明「ダークツーリズム入門(第12回)満州というプリズム(前)」『ゲンロン〈特集〉幽霊的身体』5、東浩紀編、株式会社ゲンロン、2017a
- 井出明「ダークツーリズム入門(第13回・最終回)満州というプリズム(後)」『ゲンロン〈特集〉ロシア現代思想Ⅰ』6、東浩紀編、株式会社ゲンロン、2017b
- 井出明『ダークツーリズム——悲しみの記憶を巡る旅』幻冬舎、2018
- 犬塚康博『反博物館論序説——二〇世紀日本の博物館精神史』共同文化社、2015
- 猪股祐介「満洲の記憶(日本人)」『二〇世紀満洲歴史事典』貴志俊彦・松重充浩・松村史紀編、吉川弘文館、2012
- 今井雅和「満蒙開拓再考」『専修大学社会科学研究所報』611・612、2014
- 内原訓練所史跡保存会事務局編『満州開拓と青少年義勇軍——創設と訓練』1998
- 大石茜「青少年義勇軍の記憶——会報を通じた継承と変容」『戦後日本の満洲記憶』佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編、東方書店、2020
- 大出尚子『『満洲国』博物館事業の研究』汲古書院、2014
- 金子淳「博物館における場所性とオーセンティシティ」『桜美林論考 人文研究』10、2019
- 高媛「ノスタルジーと観光——戦後における日本人の『満洲』観光」『国際交流』89、2000
- 高媛「記憶産業(メモリアルインダストリー)としてのツーリズム——戦後における日本人の『満洲』観光」『現代思想』29(4)、2001
- 高媛「『観光楽土』としての満洲——帝国の『野外劇場』」『環 歴史・環境・文明』10〈特集 満洲とは何だったのか〉、藤原書店、2002a

- 高媛「『二つの近代』の痕跡——一九三〇年代における『国際観光』の展開を中心に」『一九三〇年代のメディアと身体（青弓社ライブラリー23）』吉見俊哉編、青弓社、2002b
- 高媛「(中国の視点から)『国恥』と観光——旅順の歴史景観と戦争記憶の商品化」『日中韓ナショナリズムの同時代史』同時代史学会編、日本経済評論社、2006
- 古賀由起子「都市への記憶——『満洲国』建築へのまなざし」『文化の実践、文化の研究：増殖するカルチュラル・スタディーズ』伊藤守（編）、せりか書房、2004
- 国立歴史民俗博物館編『歴史展示とは何か——歴博フォーラム 歴史系博物館の現在・未来』アム・プロモーション、2003
- 小林慶二『観光コースではない「満州」——瀋陽・長春・ハルビン・大連・旅順』高文研、2005
- 斉藤充功「満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所——その歴史を旅する」『DARK tourism JAPAN 産業遺産の光と影』ダークツーリズム・ジャパン編集部編、東邦出版、2016
- 坂部晶子「中国東北地区における『満洲』にかんする記憶の表象——コメモレション施設の展示をととして」『ソシオロジ』49(1)、社会学研究会、2004
- 坂部晶子「慰霊というコメモレションと当事者の語りのあいだ——開拓団の逃避行の記憶をめぐって」『北東アジア研究』13、鳥根県立大学北東アジア地域研究センター、2007
- 坂部晶子『『満洲』経験の社会学——植民地の記憶のかたち』世界思想社、2008
- 佐藤彦・菅野智博・湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』、東方書店、2020
- 周家彤「長春市における『満洲国』遺跡群」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』6、2011a
- 周家彤「長春市における『満洲国』遺跡群の諸様相」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』7、2011b
- 周家彤「長春市における『満洲国』遺跡群の保護状況に関する考察」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』9、2013
- 千住一「日本統治下台湾・朝鮮・満洲における観光に関する研究動向」『地域創造学研究 奈良県立大学研究季報』22(2)、2012
- 地球の歩き方編集室『地球の歩き方D04 大連・瀋陽・ハルビン 中国東北地方の自然と文化 2015～16年版』ダイヤモンド・ビッグ社、2014
- 地球の歩き方編集室『地球の歩き方D04 大連・瀋陽・ハルビン 中国東北地方の自然と文化 2019～20年版』ダイヤモンド・ビッグ社、2018
- 張海燕「旅順における歴史的遺産の観光活用に関する研究」『アジア経営研究』22、アジア経営学会、2016
- 寺沢秀文「語り継ぐ『満蒙開拓』の史実——『満蒙開拓記念館』の建設実現まで」『信濃』65(3)、信濃史学会、2013

「記憶の場」が再構成する「満洲」(村田)

- 時里奉明・梶原宏之「特別研究報告：歴史民俗展示の新たな可能性——国立歴史民俗博物館と福岡市博物館のリニューアルを事例に」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』25、2014
- 友原嘉彦「観光地としての中国東北地方」『四日市大学総合政策学部論集』12(1-2)、2013
- 永井良和「異文化接触とネットワーク——植民地都市・大連と文化の重層」『組織とネットワークの研究』研究双書112、関西大学経済・政治研究所、1999
- 西澤泰彦『図説「満洲」都市物語 ハルビン・大連・瀋陽・長春』河出書房新社、1996
- 西原和海「写真にみる『満洲』イメージ」『環 歴史・環境・文明』10〈特集 満洲とは何だったのか〉、藤原書店、2002
- ノラ、ピエール編・谷川稔監訳『記憶の場：フランス国民意識の文化＝社会史：第1巻 対立』岩波書店、2002（原著は1984）
- マキアーネル、ディーン著・安村克己他訳『ザ・ツーリスト——高度近代社会の構造分析』学文社、2012（原著は1976）
- 松村嘉久「祖国中国をいかに見せるのか——観光、スペクタクル、中華民族主義」『中国研究月報』54(1) (No. 623)、社団法人中国研究所、2000
- 松山薫「日本各地の『日輪兵舎』——忘れられた満蒙開拓青少年義勇軍の象徴」『季刊地理学』67、2015
- 村田麻里子「ミュージアムが語る『負の遺産』——展示手法から考える」『セミナー年報2020』、関西大学経済・政治研究所、2021a
- 村田麻里子「ミュージアムの展示における脱植民地化——『コロニアル・テクノロジー』を脱構築する手法の検討」『関西大学社会学部紀要』53(1)、2021b
- 安川晴基「文化的記憶のコンセプトについて——訳者あとがきに代えて」『想起の空間：文化的記憶の形態と変遷』アスマン、アライダ著・安川晴基訳、水声社、2007
- 安川晴基「『記憶』と『歴史』——集会的記憶論における一つのトポス」『藝文研究』慶應義塾大学文学会、2008
- 山口誠・須永和博・鈴木涼太郎『観光のレッスン——ツーリズム・リテラシー入門』、新曜社、2021
- 山室信一『キメラ——満洲国の肖像 増補版』中央公論社、2004（初版1993）
- 山室信一「〈インタビュー〉満洲・満洲国をいかに捉えるべきか（聞き手＝藤原良雄）」『環 歴史・環境・文明』10〈特集 満洲とは何だったのか〉、藤原書店、2002

参考資料

『朝日新聞』「資料館建設へ調査 満蒙開拓の訓練所があった内原町」（朝刊・茨城）1995.9.29

- 『朝日新聞』「(インタビュー) 満蒙開拓の『真実』 満蒙開拓平和記念館館長 寺沢秀文さん」
(朝刊) 2021.8.31
- 『朝日新聞』「(平和を訪ねる) 町長の悩み 青少年義勇軍の『故郷』、記念館構想」(朝刊)
1997.8.18
- 『朝日新聞』「日本家屋はいま(下) 大連 消えゆく戦前建築」2018.6.27
- 『産経新聞』「鼓動2013 中国 安重根の記念館設置問題 韓国から『反日共闘』の誘い」(朝刊・大阪) 2013.7.19
- 『大連舊景』(絵葉書集)、人民美術出版社、発行年不詳
- 寺沢秀文「満蒙開拓平和記念館 Facebook Live 配信 (2019.5.26)」<https://www.youtube.com/watch?v=bjSmC-DK-UU> (最終閲覧2021.8.8)
- 寺沢秀文監・三沢亜紀編『満蒙開拓平和記念館 (図録)』2015
- 長野県立歴史館編『令和3年夏季企画展 青少年義勇軍が見た満州——創られた大陸の夢』
2021
- 夏日漱石「満韓ところどころ」『朝日新聞』1909.10.21～12.30連載(『夏日漱石全集7』筑摩書房、1988所収)
- 博物館事業促進会『博物館研究』2(1)、1929
- 『ハフポスト』「安重根記念館がハルビンに完成 外務省は『けしからん話だ』と中韓に抗議」
2014.1.20 https://www.huffingtonpost.jp/2014/01/20/an-chung-gun-memorial_n_4629888.html (最終閲覧2021.08.23)
- 日本博物館協会『博物館研究』14(3)、1941
- 日本博物館協会『博物館研究』15(9)、1942
- 『南信州新聞』「水曲柳会の訪中団が開拓団跡地など訪問」2019.9.6 <https://minamishinshu.jp/>
(最終閲覧2021.08.23)
- 八洲会編『嫩訓の思い出(会報)』22、1996
- 八洲会編『嫩訓の思い出(会報)』24、1998
- 『読売新聞』「戦地で生きた開拓少年 県立歴史館 今夏企画展」(朝刊・長野) 2021.8.24
- 李重他編『偽“満洲国”明信片研究』吉林文史出版社、2005
- その他 各館HP、パンフレット等

※「3.2 内原郷土史義勇軍資料館」の執筆にあたっては、大石茜氏(筑波大学大学院人文社会科学研究科)に貴重な資料をご提供いただいた。この場を借りて御礼申し上げる。